

藤本強先生を偲ぶ

西秋 良宏

In memory of the late Prof. Tsuyoshi Fujimoto

Yoshihiro NISHIAKI

東京大学名誉教授藤本強先生が2010年9月10日、ドイツで亡くなられた。雅子夫人と世界文化遺産の取材旅行中、ローテンブルグのホテルにて病で急逝されたとのこと、長く御指導いただいた者の一人として痛惜の極みである。

藤本先生は1936年、東京でお生まれになり、1959年の東京大学文学部御卒業後、同大学院をへて文学部考古学研究室の助手をつとめられた。その後、北海道にある同付属常呂実習施設助教授をへて1985年には東京にお戻りになり文学部教授就任。そして1994年から96年には文学部長、大学院人文社会系研究科長の重責を担われた。1997年の東京大学退官後は新潟大学教授、國學院大學教授、さらには早稲田大学客員教授などを歴任され、お亡くなりになった時には福島県文化財センター白河館館長であられた。この間、公職も数多く、文化審議会世界文化遺産特別委員会委員長などもおつとめになっている。西アジア考古学の分野で言えば、2010年3月まで続いた文部科学省科学研究費特定領域研究『セム系部族社会の形成』の外部評価委員に御就任いただいていたことは記憶に新しい。お休みになる間もないと思われるほどご活躍されていた先生の客死はまさに青天の霹靂であった。

多くの大学で教鞭を執られたこともあり、教え子の中には日本西アジア考古学会の会員も少なくない。私のことを述べさせていただければ、東京大学の文学部学生時代は先生が常呂におられたから、野外実習が御指導の最初だった。タオルと長靴、シャベルがよく似合うおよそ大学の先生とは思えない風体、そしてざっくばらんな語り口に、進学したばかりの私どもは驚いてしまった。また、遺物実測では、「俺みたいな年になると実測したくても出来なくなるんだから若いうちに徹底的にやっつけ」、とおっしゃっていたのをよく覚えている。

本格的に御指導いただいたのは、1985年に本郷にお戻りになってからである。それまでの大学院指導教官、上野佳也先生のところから移ることになり、図らずも藤本先生にとって最初の指導学生の一人という恩恵に浴した。とはいえ西アジア考古学を講じられたのではなく、考古学の方法論が主たる講義テーマであった。特に遺物の空間分析や

属性分析について熱心に教えてくださった。講義ではレポートの提出がいつも求められた。「コメントをするから郵送ではなく直接もってこい」、とおっしゃるのが常であった。提出に出向くのはいつも江戸の発掘現場。というのも、藤本先生は当時、本郷キャンパスで大々的に始まった加



藤本強先生（写真：佐藤宏之氏提供）

賀藩邸遺跡の発掘の指揮をとっておられたからである。年柄年中、現場に出ておられた。重機の音がかまびすしい江戸の現場で、あるいは陶磁器に埋もれたプレハブで、常呂時代と同じような格好をした先生と西アジアの石器について議論するのは不思議な体験であった。ご自身でユンボを操縦されているところへ、おじゃましたことすらあった。また、私たちのレポートは、当時の学生には高嶺の花であった、しかし今と比べれば恐ろしく性能の低い出始めのワープロを駆使して、先生が自ら印刷製本してくださっていた。お忙しい中で信じられないほどお手間をかけていたに相違ないが、学生にとっては自分の論文が活字になったよううれしかったし、考えを整理し直す絶好の機会となった。実際、私には処女論文を始め、藤本先生に提出したレポートで後に雑誌論文になったものが少なくないのである。そのようにパワフルで効率的、実質的な学生指導が今の自分に出来ているのか顧みると少々恥ずかしい。

御著書が数多く、かつ幅が広いのは皆がよく知るとおりである。西アジアはもちろん、世界の旧石器、縄文、江戸、北海道、沖縄、さらには中国都城や古代ローマ、そして文化財保護や世界遺産問題の考察。加えて、考古学の概説や方法論、そして、日本、世界の考古学通史。御専門を時代や地域で特定しがたいほど多岐にわたる著作をものされた。大学を退かれた後は、さらに執筆活動に拍車がかかったように思う。毎年のように新著をお送りいただくたび、一体、いつ充電され執筆なさっているのか驚嘆を繰り返し

ていたというのが本音である。各種の推薦状をお願いしに行くと、「わかった、そこで待ってろ」、と言って推敲もせずその場で一気に書いてしまわれるほど速筆の先生であったとはいえ、実のある知識と考えの整理なくしてはあの膨大な著作はありえない。御著書からするに、藤本先生の専門を西アジア考古学でくくるのは明らかに間違いである。該博な知識にもとづいて考古学による世界史、あるいは比較考古学に取り組みられたというのがより近いのだろう。しかし、大きな視野をもった世界観、考古学観を披瀝され得たのは、先生が、そのような観点がいやでも必要とされる西アジア先史時代の研究で研究者人生をスタートされたことが反映しているのではないかと僭越ながら思う。

西アジアの個別研究では終末期旧石器時代の穀物利用が最大の御業績の一つに数える。食糧生産は新石器時代に革命的に始まったのではなく、その前史として終末期旧石器時代の紆余曲折があったことを、くり返し実資料をもとに論じられていた。卒業論文、修士論文で扱って以来のテーマであったそうだからライフワークのお一つでもあったといえる。1970年代から80年代にかけて発表されたシリア沙漠、パルミラ遺跡群の石器分析、それにもとづいた穀物利用変遷史の再構築は今なお引用やまぬ国際的な業績である。また、新石器時代の穀物利用の素地を作った物質文化の一つである磨石や細石器については地球規模で類例を集成され、複数冊にまたがる総説をまとめられている。それらは、この道を志す若手にとっては格好の道しるべであり続けている。

晩年にはイタリアに足繁く通い発掘を指導されていた先生であるが、西アジアの現場を御一緒する機会は私にはついになかった。進んで人前にでていく先生ではなかったとお見受けしていたが、一方で、江戸っ子口調で決断早く、かといって押しつけることもなく人を引っ張る、引きつける指導力は抜群であった。現場の記録もモノの整理も分析、報告執筆も誰よりも素早くこなされる先生であった。西アジアの現場をご一緒する機会があったとしたら、何から何までお一人でおやりになったような気もするが、それでいて、後進にも目配りする理想の現場になったように思う。今となってはかなわぬ話である。

先生は、西アジアにどっぷり浸かって現地に通り続ける私どもをどう見ておられたのだろうか。1998年に寄稿な

さった『日本西アジア考古学会通信』第4号のエッセイが興味深い。前年の1月に発足したばかりの若かった本会の行方を応援しつつ、気になることも書かれている。曰く、「人類史の…最先進地域である西アジア考古学のもつ意味…は大きく揺らいできている。多くの地域で考古学の調査が盛んに実施されるようになり、…西アジア考古学のもつ意味は絶対的なものから、多くの地域の中の一つの地域という相対的なものになってきつつある…」。食糧生産発祥の地、文明発祥の地、一神教発祥の地…、西アジアがいかに特別な地域であるかを未だに声高に述べている私などとは見方が違う。地球規模で過去を調べ抜いた広範な視座をもって冷静に西アジアを眺める見識をお持ちであった。そうでなくては考古学による世界史の執筆など為しえぬことであつたに違いない。

2010年の11月、藤本先生の西アジア考古学に再び接する機会を得た。1974年にシリアのパルミラに調査に行かれた際の私的な表面採集コレクションが、御遺族の手によって東京大学総合研究博物館に寄贈されたのである。終末期旧石器時代を中心とした、切りのよい、ちょうど500点の石器標本であった。丁寧に分類し、ラベルが付けられていたから藤本先生の型式分類がよくわかる。『セム系部族社会の形成』プロジェクトでパルミラからほど近いビシュリ山系で見つけた終末期旧石器遺跡群の年代推定に早速、活用させていただいている。私事を繰り返せば、西アジアの旧石器を志して『旧石器文化の研究』（雄山閣）や『石器時代の世界』（教育社）をぼろぼろになるまで読み返した初学時以来、職を得てからも加賀藩邸遺跡や常呂遺跡群の展示を担当した際など、藤本先生のお仕事を勉強させていただく機会が実に多い。今度はシリア沙漠の終末期旧石器である。自らの小さな歩みの何と多くが先生の後を追っているのか、負っているのか、思い知らされること大である。今なお導いていただけていることの幸甚さが身にしみる。

遺贈コレクションは学問の形見分けだと思う。先生は亡くなられたがモノは残る。一部とはいえ藤本先生の西アジア研究を公的に語り継ぎうるよすがを得たことを喜びたい。多年にわたる学術への御貢献に謹んで敬意を表し、これまでの学恩に襟を正して再度、御礼申し上げる次第である。

西秋 良宏

東京大学総合研究博物館

Yoshihiro Nishiaki

The University Museum, The University of Tokyo